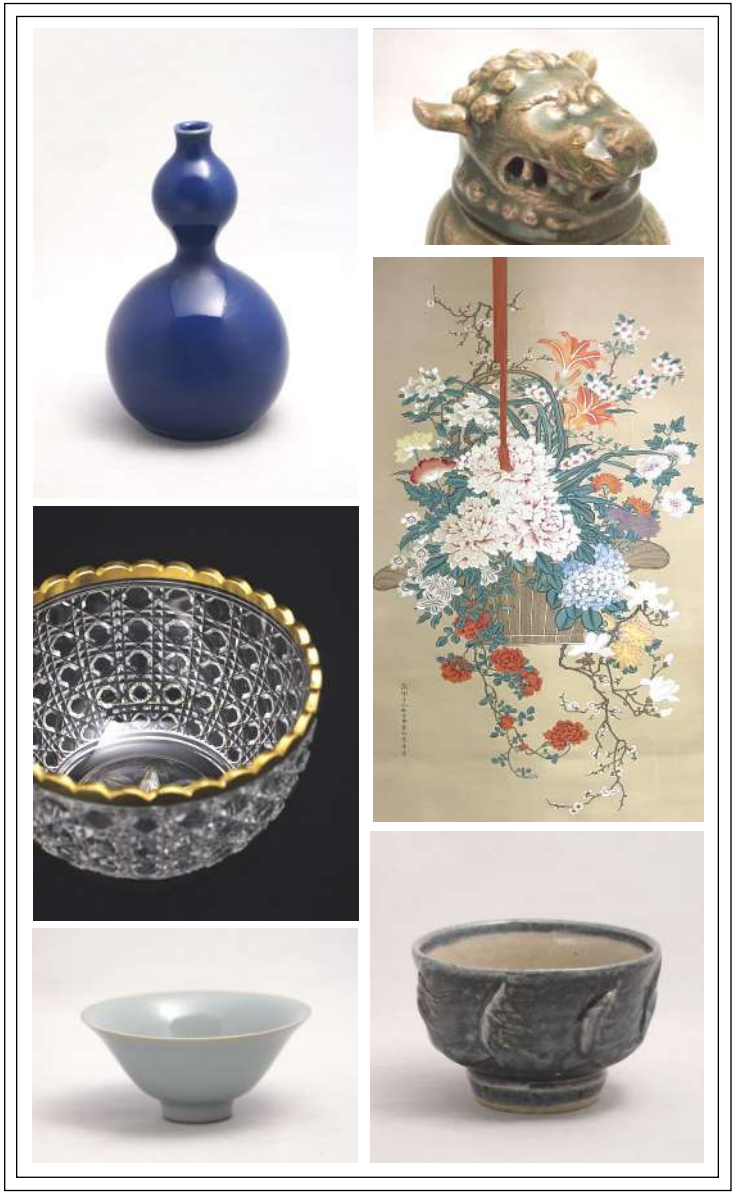


# 連峯堂　彩り　秋号

RENPOUDO'S COLLECTION AUTUMN.

2022

奥田連峯堂

TEL:075-561-3655

FAX:075-525-1148

営業時間：11時 - 18時

定休日：毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

https://www.renpoudo.com

✉ renpoudo@mth.biglobe.ne.jp

１．

## 青磁獅子香炉

### 青木 木米

5代清水六兵衛極箱
江戸時代
径12cm×13cm　高さ16cm

深みのある緑色の青磁に、全体的に貫入が入っています。右後ろ足の付け根付近に「木米」、「古器観」の印が有ります。右前足の部分と合口にソゲが有ります。

青木木米は、江戸時代に京都に生まれ、永楽保全、仁阿弥道八と共に「京焼の幕末三名人」と呼ばれました。
箱書きをした5代清水六兵衛（1875 – 1959）は、大正から昭和期の京焼の陶工です。江戸期から代々、清水六兵衛と名乗っている京焼の名跡です。

２．

## 古清水　松竹梅図瓶

江戸時代
口径2cm　胴径13.5cm　高さ30cm

金彩と緑、青色の釉薬を用いて松竹梅が描かれています。
胴の中央に松、下部分に笹、首部分に梅が描かれています。
ところどころ金彩がはがれている部分があります。
高台にサインのようなものが書かれていますが、詳細は不明です。

３．

## 瑠璃釉瓢箪形徳利

### 古伊万里

野村泰三鑑定書
江戸時代
口径2cm　胴径11cm　高さ18.5cm

鮮やかな藍色の徳利です。全体的に瑠璃釉を掛けてあり、高台は無釉です。

古陶磁収集、研究家である野村泰三氏の鑑定書が付いています。

４．

## 蒔絵兜香炉

江戸時代
径7cm×7cm　高さ13.5cm

兜の部分が蓋となる香炉です。
兜の前方部分には亀甲に花菱文様が蒔絵されています。
身の部分には鱗文様、菊桐唐草文様、波文様が蒔絵されています。

兜の角の先が小さなホツがあります。兜と台の接合部分にわずかに割れが見られます。台の角の小さな柱にピリ割れが見られます。

５．

## 古染付　芙蓉手台鉢

中国 明時代末期（17世紀）
径13.5cm　高さ9cm

胴の外側には草花が絵付けされ、足の部分にも文様が絵付けされています。少しかしいでいます。
見込みは無地の白地です。口縁には、虫食いが見られるのと、窯キズが有ります。高台は窯でできた割れが見られます。

中国 明時代末期・天啓年間（1621～27）頃を中心に、江西・景徳鎮の民窯で焼かれた染付磁器 古染付のひとつです。

６．

## 古染付　芙蓉手兜鉢

中国 明時代末期（17世紀）
径20.5cm　高さ6.5cm

古染付は、一般的に中国 明時代末期・天啓年間（1621～27）頃を中心に、江西・景徳鎮の民窯で焼かれた染付磁器のことで、日本での呼び名です。江戸時代初期の日本では茶人が新奇な茶道具や飲食器を注文焼成させる風潮もあり、日本人好みの茶道具や飲食器を中国へ注文したと考えられています。中国では明朝が衰退していく乱世の中で、景徳鎮民窯が官窯に取って代わった時期であり、民窯の染付磁器は、胎土や釉薬などが決して上質とは言えませんが、それまでの型にはまった様式から一歩踏み出し、簡略で自由奔放な絵付けや、独創的な造形、釉薬が剥奪している虫喰でさえからも自然の風流な味わいを見出して喜び、粗雑な雰囲気を趣きがあるとして、その当時の日本人は愛玩しました。そして、その愛でる文化は今日まで引き継がれています。

本作品は、古染付の代表的なデザインである芙蓉手の兜形の鉢です。芙蓉手とは、見込中央に大きく円窓を設け、その周囲を区切る文様構成が、大輪の芙蓉の花を連想させることから、日本では芙蓉手と呼ぶようになりました。見込みには花鳥図が描かれています。

７．

## 花紋鉄釉扁壷

### 河井 寛次郎

河井武一極箱
昭和
口径10.6cm　胴径10.5cm×17cm　高さ23cm

大正から昭和の時代、民藝運動の中心的役割を担った
陶工 河井寛次郎の作品です。
全体的に鉄釉が掛けられ、両面には花文様が描かがれ
ています。
寛次郎の甥の河井武一の極め箱が有ります。

８．

## 泥刷毛目呉須碗

**河井 寛次郎**

共箱
昭和
径13cm　高さ8cm

泥刷毛目とは、意に染まない筒描をやり直すために生乾きの泥漿を布で拭った際に、偶然拭き後に残った激しい荒波の様な模様の面白さに気づいたことから生まれた寛次郎独創の技法です。呉須の色はその深い藍色の中に渦巻く盛り上がったうねりが躍動感を表現しています。このエネルギッシュな表現は無作為であるかのように見えて、寛次郎の確かな意志をもって見る者に迫ってくるようです。同様の技法を用いて制作されたお碗が「ふるさと安芸に贈られた河井寛次郎のこころ」図録に掲載されています。

９．

## 柿釉赤絵丸紋角瓶

**濱田 庄司**

共箱
昭和
口径3cm×3.4cm　胴径10.2cm×10cm　高さ23cm

大正から昭和の時代、柳宗悦や河井寛次郎らと共に民藝運動の中心的役割を担った陶工 濱田庄司の作品です。
全体に鉄釉が施され、四面にそれぞれ違った丸文様が描かれています。

１０．

## 淡鐵釉藁描扁壷

**舩木 研兒**

共箱
昭和 － 平成
口径10.5cm　胴径22.5cm×24cm　高さ30cm

島根県松江市の宍道湖畔に舩木窯はあります。江戸時代より170年の歴史を持ち、その5代目である舩木研兒は、早くから父・道忠を手伝いながら、浜田庄司やバーナード・リーチより学びました。

スリップウェアの技法を駆使した絵画的な陶板や絵皿などを生み出しました。そして、数々の賞を受賞し、海外の陶芸展に招待されるなど国内外で高く評価されました。

とても迫力があり、ずっしりとしていて重さがあります。

１１．

## 白釉藁描扁壷

**舩木 研兒**

共箱
昭和 - 平成
口径10.8cm　胴径25cm×17.5cm　高さ34cm

舩木研兒は、島根県布志名に生まれ、濱田庄司に師事しました。また、バーナード・リーチが舩木研兒の父・舩木道忠と親しかったため、自宅を何度も訪れており、その縁からイギリスに渡り、リーチの窯場にて研修しました。

口から肩にかけては、ほんの少し黄味がかっています。口に窯キズがあります。とても迫力があり、ずっしりとしていて安定感があります。

１２．

## 彩釉牧童香炉

2代 三浦 竹泉

共箱
大正
径17cm×7.5cm　高さ12cm

牧童は、牧場で家畜の世話をする者のことです。牧童と関連する事柄に十牛図があります。十牛図とは、牧童が牛を探し求める物語に沿って悟りを得る過程を示した画題のことです。足の間に竹泉の彫銘が有ります。

１３．

## 純銀松竹梅香炉　「三寿器」

## 帖佐 美行

共箱
昭和 - 平成
径10cm　高さ9.5cm

側面には、松と笹の図柄が彫られ、蓋に梅が彫られた、松竹梅文様の香炉です。胴の下部に美行の彫銘が有ります。飾り用に香炉の下に敷くための黒塗の板が付いています。

帖佐美行は、鹿児島県生まれの彫金家です。文展・日展で入選を重ね活躍しました。文化勲章を受章しました。

１４．

## バカラ　金縁切子鉢

春海商店箱
昭和前期
径18cm　高さ11.5cm

戦前に作られたオールドバカラと呼ばれる古い手です。明治期にその当時の大阪の古美術商 春海商店の主人がフランス バカラ社に特別注文したものが最初です。暖かい季節に涼しげな御茶道具を求めるお茶人のために、鉢などの懐石食器や水指などを注文しました。色や形を設計図のようにして、注文していたそうです。
こちらの鉢はその流れを汲んだ特別注文されたもののひとつだと考えられます。切子のように胴部分が外側からカッティングされて、口縁は金を縁取っています。

１５．

## 金縁千筋コップ　6客組

### バカラ

昭和
径6cm　高さ11.5cm

明治期にその当時の大阪の古美術商 春海商店の主人が、フランス バカラ社に特別注文しました。暖かい季節に涼しげな御茶道具を求めるお茶人のために、鉢などの懐石食器や水指などを注文しました。本作品も、その流れを汲む作品だと考えられます。春海好みを代表する装飾である千筋文が施されています。エッチングされた細い線状の装飾は、春海商店の注文によりバカラ社で開発された技法です。箱は無地の合わせ箱です。刻印などはありません。少々、使いスレがあります。

１６．

## 地釉象嵌縄文コーヒーセット

## 島岡 達三

共箱
人間国宝
昭和 － 平成

| | | |
|---|---|---|
| コーヒーカップ | ：径11.5cm | 高さ6.5cm |
| ソーサ | ：径15.5cm | 高さ3cm |
| 砂糖入 | ：径11.5cm | 高さ9cm |
| ミルク入 | ：径12.5cm | 高さ6cm |

島岡達三は、濱田庄司に弟子入りしました。その後、組紐屋に生まれたことも有り、縄文象嵌という技法を編み出し、人間国宝に認定されました。縄文象嵌は作品に縄目を施して色の違う土をはめ込む（象嵌する）技法です。コーヒーカップとソーサ―が6客ずつに、ミルク入と砂糖入が付いています。高台や高台脇には達三の「タ」の字が刻印として押されています。

砂糖入

ミルク入

１７．

## 象嵌赤絵草花文組小鉢　6客組

**島岡 達三**

共箱
人間国宝
昭和 - 平成
径13.5cm　高さ8cm

島岡達三は、濱田庄司に弟子入りし、その後、組紐屋に生まれたことも有り、縄文象嵌という技法を編み出し、人間国宝に認定されました。縄文象嵌は作品に縄目を施して色の違う土をはめ込む（象嵌する）技法です。本作品では、胴の部分に使われています。
「食器展（東京美術倶楽部、昭和58年）」図録に類似品が掲載されています。

１８．

## 絵替湯呑　5客組

### 9代 白井 半七

共箱
昭和
径 約6.4cm　高さ 約8.2cm

口縁には鉄釉が施され、胴には鶴や、波に舟などの文様が描かれています。
9代半七は先代の8代と共に、吉兆の湯木貞一氏と親交が深く、吉兆の器も多く作っていたと言われます。
1客のみ半七印が無いものがあります。

１９．

## 萃瓷練上酒呑

**松井 康成**

共箱
人間国宝
昭和 － 平成
径7cm　高さ4.5cm

２０．

## 蓬莱盃

**清水 卯一**

共箱
人間国宝
昭和 － 平成
径6cm　高さ4.5cm

２１．

## 青磁盃

### 川瀬 忍

共箱
昭和 －
径6.8cm　高さ2.5cm

川瀬忍は、中国宋時代の古陶磁を目指しながらも、その造形・色は現代的感覚を放つ繊細優美な青磁を創造し、現代の青磁の作り手を代表する人気作家です。

２２．

## 青釉胡姫文酒杯

### 加藤 卓男

共箱
人間国宝
昭和 － 平成
径7cm　高さ4cm

２３．

## 皮鯨盃

### 小山 冨士夫（古山子）

共箱
1965年
径7.8cm 高さ 3.5cm

小山冨士夫は、陶芸家であり、中国陶磁器研究の大家でもありました。古山子は陶芸家としての号です。皮鯨とは、口縁の黒っぽい色を鯨の皮、その下の白っぽい部分を 鯨の身に見立てたところからこの名前があります。箱書きより1965年に唐津の中里窯にて制作されたことが分かります。中里窯とは、中里無庵（人間国宝）の窯のことです。

２４．

## 井戸ぐい呑

### 辻村 史朗

共箱
昭和
径8.3cm　高さ4.5cm

辻村史朗は、奈良の大自然の山中で制作しています。
井戸茶碗に魅せられ作陶を決意しました。
師を持たず、独自で窯を築き陶芸を始めました。

２５．

## 象嵌ぐい呑

**島岡 達三**

共箱
人間国宝
昭和 － 平成
径7.5cm　高さ4.8cm

２６．

## 馬上杯

**河村 蜻山**

共箱
橋本関雪 字「南山寿一杯」
大正 － 昭和
径5cm　高さ4.5cm

※南山寿一杯
唐の時代の詩人、張説の「幽州新歳作」という七言律詩の最後の句。「南山（長安の南にある山）のように欠けたり崩れたりせずに寿命を永らえますように」というめでたい句。

２７．

## 信楽徳利

小山 冨士夫（古山子）

共箱
昭和
口径4.4cm 胴径 9cm 高さ 14.8cm

信楽本来の赤褐色に白い粒がふきだした素朴な美しさ、野趣豊かな自然釉の景色の変化も味のある、古山子ならではの作風、見事な焼味、仕上がりをみせる優品です。

２８．

## 練上嘯裂茶碗

### 松井 康成

共箱
人間国宝
昭和 － 平成
径13cm　高さ7cm

松井康成は、色の異なる土を重ねたり練り合わせたりして文様のある生地の土を作り成形する、練上という手法を極め、その技法を唯一無二の独自のもの として昇華させ、人間国宝となりました。
表面は少しザラザラとしています。見込みと口縁は透明釉が少し掛けられ、光沢があります。口縁をわずかに内に抱え込ませ口辺はゆるやかな起伏を成しています。
高台脇に「康」の印が押されています。

２９．

## 唐津井戸茶碗

### 中里　無庵（12代　中里 太郎右衛門）

共箱
人間国宝
昭和
径15cm　高さ9cm

中里無庵は、唐津古窯址調査をしたり、研究を重ねたり、古唐津の伝統を復興させ、人間国宝に選ばれました。

３０．

## 茶碗

## 坪島 土平

共箱
昭和 - 平成
径11.5cm　高さ8cm

胴部分には、坪島土平の作陶した窯名である広永の字のようなものが陰刻されています。片身替わりのように色味が変わっています。

３１．

## 伊賀耳付花入

### 坪島 土平

共箱
昭和 - 平成
口径8.5cm　胴径14cm　高さ26cm

「東の魯山人・西の半泥子」と称された川喜田半泥子の弟子である坪島土平による花入です。坪島土平は、三重 津市の広永窯において作陶しました。
色絵や染付などの作品もありますが、志野、織部、朝鮮唐津と作風の幅が広いです。
本作品の伊賀の写しは、師の半泥子の作陶精神を受け継ぎつつ、土平自身の個性も出た作品です。

３２．

## 黄瀬戸花入

### 加藤 孝造

共箱
人間国宝
昭和 －
口径11cm×9.7cm　高さ31.5cm

一重切の形を模した黄瀬戸の花入です。加藤孝造は、
荒川豊蔵の出会いなどもあり、桃山時代のやきものに
ついても研究され、それを作品に昇華されています。

３３．

## 砂張ゾロリ花入、黒塗ゾロリ盆

## 3代　魚住 為楽（安彦銘）

共箱
人間国宝
昭和 － 平成
花入：口径2cm　胴径6.5cm　高さ24.5cm
盆　：径22.5cm×21.3cm　高さ1.8cm

ゾロリ花入は、魚住為楽により砂張という銅と錫の合金で製作されています。独特の落ち着いた色の仕上げです。
箱書きは、三代魚住為楽襲名前の安彦銘です。
こちらのゾロリ花入には、犀光作の塗りのゾロリ盆とセットになります。

３４．

## 絵唐津三耳付水指

西岡 小十

共箱
昭和 - 平成
径18cm　高さ18.5cm

古唐津の再興に尽力した小十による水指です。
梅花文様が鉄絵で描かれています。
底に銘が彫られています。

３５．

## 摹古着彩画山水花果紋盂

### 3代 三浦 竹泉

共箱
昭和
径19cm　高さ10cm

胴の外側の窓文には山水図などの風景が描かれ、見込みには菊や柘榴などが精微な筆致で描かれています。
高台内には「竹泉監製」の彫銘が有ります。

３６．

## 瓢透手付茛盆

### 駒沢 利斎

共箱
淡々斎書付
昭和
径28cm×18cm　高さ22cm

千家十職の駒沢利斎による茛盆です。
茛盆の左下に淡々斎よる花押が書かれています。
側面には六つの瓢の透かしが有り、
「無病（六瓢）息災」に繋がります。

３７．

## 一行「空々寂々」字幅

**圓能斎**

紙本
淡々斎箱書
明治 － 大正
幅31cm　長さ160cm

13代圓能斎宗匠が「空々寂々」と書いています。
箱は圓能斎の子、14代淡々斎宗匠が箱書きしています。

空々寂々（くうくうじゃくじゃく）は、「ひっそりと静まりかえっているさま。また、心が何物にもとらわれないさま。」のことを言います。

３８．

## 額　板絵「いろは」

### 芹澤 銈介

共シール
人間国宝
額：縦30.5cm　横35cm

柳宗悦らの民芸運動に加わり、沖縄の紅型を研究して、型絵染を創始した芹澤銈介による板絵です。
朱、白、緑、黄色を用いて、いろは歌を書いています。

３９．

## 額　平和の鳩

## 林 武

昭和
額：縦33cm　横40cm

近代の日本を代表する洋画家　林武の作品です。東京芸術大学の教授も務め、文化勲章も受章していることからも、日本の洋画界において多大な影響を与えました。
鳩を中心にして、躍っているような3人の人物がラフスケッチ風に描かれています。
右下に「Take・H」のサインが有ります。

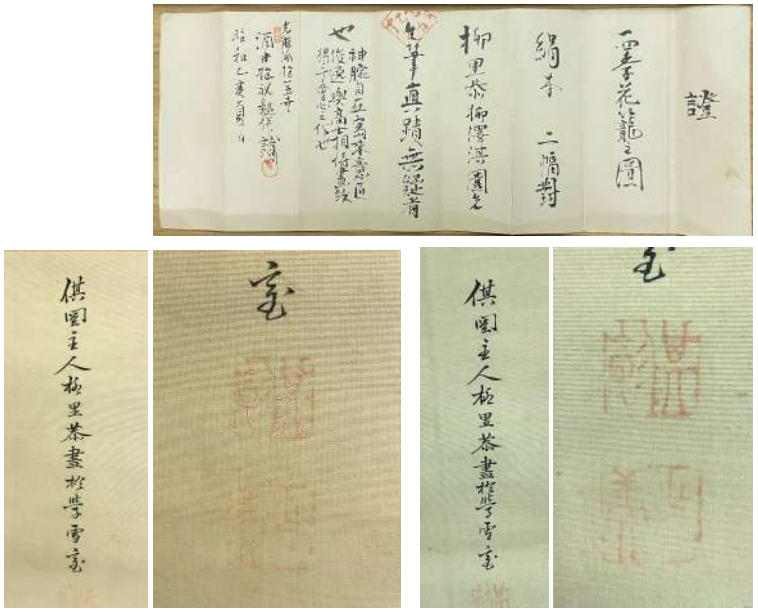
４０．

## 四季花籠図幅一双

### 柳里恭

絹本
酒井抱祝鑑定書
江戸時代
幅85cm　長さ218cm

日本の文人画の先駆者とされる柳里恭の掛軸一双の
大作です。
花籠に四季草花が盛られており大変綺麗な色彩です。
江戸琳派最後の画家で、酒井道一の息子である
酒井抱祝（1878 – 1956）の鑑定書が付いています。
ところどころに染みや折れが見られます。



# 作家略歴（五十音順）

**青木 木米**
1767（明和4）年 - 1833（天保4）年
江戸後期の文人画家・陶工。江戸時代における名工の一人。京都生。奥田頴川（陶 芸）、高 芙 蓉（書・画）に 師事。春日山窯を築き、九谷焼を再興。粟田に築窯、青蓮院宮の御用窯に命ぜられる。作品は煎茶器が主で、南蛮写し・交趾写し・染付・青磁など、中国陶磁の模倣に優れた。頼山陽、田能村竹田、篠崎小竹らと交遊。

**3代　魚住 為楽**
1937（昭和12）年 -
金沢市生。本名は魚住安彦。1953年、祖父の初代魚住為楽に師事し、銅鑼制作の道へ。1962年、(社)日本工芸会正会員（現在に至る）。2000年、紫綬褒章、石川県文化功労賞。2002年 三代魚住為楽を襲名、同年、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定。

**圓能斎**
1872（明治5）年 - 1924（大正13）年
茶道裏千家十三代家元。又妙斎の長男。幼名は駒吉。北白川宮・小松宮両親王より円能斎・鉄中の号を賜る。茶道の復興に努め、門弟の指導・講習・月報の発刊と軌道興隆に尽した。

**加藤 孝造**
1935（昭和10）年 -
岐阜県瑞波市に生まれ。昭和26年、岐阜県陶磁器試験場に入り、5代加藤幸兵衛に学ぶ。45年、多治見市に穴窯を築き独立。同年荒川豊蔵に師事。21年、日本陶磁協会賞金賞、22年、瀬戸黒で人間国宝。

**加藤 卓男**
1917（大正6 ）年 - 2005（平成17）年
岐阜県多治見市生まれ。父 5代加藤幸兵衛に師事。古代ペルシア陶器の斬新な色彩や独創的な造形、釉調に魅力を感じ、西アジアでの長年の発掘研究を経て、滅び去った幻の名陶ラスター彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵など、高い芸術性を持つ異民族の文化と日本文化との融合に成功。平成7年に人間国宝に認定。

**河井 寛次郎**
1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き、作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

**河村 蜻山**
1890（明治23）年 - 1967（昭和42）年
京都市立陶磁器試験場を修了し、家業の陶業を継ぐ。大正15年日本工芸美術会の創立に参加。昭和3年帝展無鑑査となり、帝展・新文展・日展の審査員をつとめる。6年日本陶芸協会設立に参加。13年千葉県我孫子に、29年北鎌倉に窯を移した。38年芸術院恩賜賞。

**川瀬 忍**
1950（昭和25）年 -
二代竹春の長男として、神奈川県大磯に生まれる。三代続く陶家に育ち、18歳より作陶の道に入る。過去の優品に学び、研究を重ねた豊かな経験に裏打ちされた作品は、高い技量と作家独特の感性から生まれる、洗練された美を湛えている。

**小山 冨士夫**
1900(明治33)年 - 1975(昭和50)年
中国陶磁器研究の大家・陶芸家。号：古山子。岡山県浅口郡玉島町（現・倉敷市玉島）出身。主に鎌倉市を拠点にして執筆、陶磁器研究では、中国北宋時代の名窯、定窯跡を発見し、世界的な陶磁学者として名声を確立。晩年に至るまで実証的東洋陶磁研究をして、古陶磁研究書など多く執筆寄稿。晩年には、岐阜県土岐市泉町に「花の木窯」を開き作陶。陶芸家として、茶器を始め多様な作品を造った。

**14代 駒沢 利斎**
1908（明治41）年 - 1977（昭和52）年
指物師。名「浪江」、十三代の妻。駒沢利斎は、千家十職の一つ。三千家御用達の棚や香合、炉縁などを製作する指物師が代々継承する。

**島岡 達三**
1919（大正8）年 - 2007（平成19）年
東京の組紐屋の家に生まれる。浜田庄司に学び、1953年、益子に窯を築く。組紐を転がし、そこに化粧土をかける縄文象嵌という独自の技法を生み出す。1996年、重要無形文化財(人間国宝)認定。

**清水 卯一**
1926（昭和元）年 - 2004（平成16）年
京都生まれ。昭和15年、石黒宗麿に師事。京都市立工業研究所窯業部助手。その後は自宅陶房を中心に陶芸活動に専念。昭和33年、ブリュッセル万国博覧会グランプリを受賞。昭和60年、人間国宝に認定。

**9代 白井 半七**
1928（昭和3）年 - 1987（昭和62）年
京都芸術大学卒業後、8代と同様に乾山写を得意とし、その他にも、独自の作風の茶陶も製している。昭和55年、兵庫県三田市大原に移窯。8代と共に料亭「吉兆」と親交を深めており、茶道具や会席の器など「吉兆好」の作品をよく残した。

**芹澤 銈介**
1895（明治28）年 - 1984（昭和59）年
静岡市生まれ。東京高等学校図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型に出会ったことにより型染めを中心とした道に進む。1956年、人間国宝に認定。

**帖佐 美行**
1915（大正4）年 - 2002（平成14）年
彫金家、文化勲章受章者。鹿児島県生まれ。本名・良行。小林照雲、海野清に師事。1942年新文展に初めて入選、戦後は日展に出品し、1954年特選、翌年も特選。1957年日展審査員。1958年日本金工作家協会結成に参加、日展評議員。1962年現代工藝美術家協会結成に参加。1966年日本芸術院賞受賞。1969年日展理事、1974年日本芸術院会員、1975年日展常務理事。1978年日本新工芸美術家連盟を結成。1987年文化功労者、1993年文化勲章受章。

**帖佐 美行**
1915（大正4）年 - 2002（平成14）年
彫金家、文化勲章受章者。鹿児島県生まれ。本名・良行。小林照雲、海野清に師事。1942年新文展に初めて入選、戦後は日展に出品し、1954年特選、翌年も特選。1957年日展審査員。1958年日本金工作家協会結成に参加、日展評議員。1962年現代工藝美術家協会結成に参加。1966年日本芸術院賞受賞。1969年日展理事、1974年日本芸術院会員、1975年日展常務理事。1978年日本新工芸美術家連盟を結成。1987年文化功労者、1993年文化勲章受章。

**辻村 史朗**
1947（昭和22）年 -
奈良県御所市に生まれる。昭和44年、作陶を始める。平成11年、裏千家茶道資料館にて「辻村史朗 壷と茶碗展」開催。平成15年、ニューヨーク・メトロポリタン美術館「ORIBE展」に出展。以降、日本各地、ニューヨークで個展開催。

**坪島 土平**
1929（昭和4）年 - 2013（平成25）年
大阪生まれ。1946年、川喜田半泥子に師事。1963年、川喜田半泥子没後に廣永陶苑を継承。大阪高島屋にて個展開催、以降、東京日本橋高島屋と共に個展開催。

**中里 無庵**
1895（明治28）年 - 1985（昭和60）年
11代中里太郎右衛門の次男として、佐賀県唐津に生まれる。佐賀県立有田工業高校別科製陶科を卒業。
1927年、父の歿後、12代中里太郎右衛門を襲名。古窯址や陶片資料の研究に励み、古唐津の伝統を復興する。
伝統技法を現代茶陶に生かした叩き技法などの独自の作風を生み出す。1966年、紫綬褒章受章。1969年、京都大徳寺にて得度、号の無庵を受ける。13代中里太郎右衛門に家督を譲る。1976年、重要無形文化財「唐津焼」保持者に認定。

**濱田 庄司**
1894（明治27）年 - 1978（昭和53）年
神奈川県生まれ。東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科に入学、板谷波山に師事。同校を卒業後は、河井寛次郎と共に京都市立陶芸試験場にて主に釉薬の研究を行う。この頃、柳宗悦、富本憲吉、バーナード・リーチの知遇を得る。大正9年、イギリスに帰国するリーチに同行、共同してセント・アイヴスに築窯。大正13年、帰国し、沖縄　壺屋窯などで学び、その後、栃木県益子町で作陶を開始。昭和30年、人間国宝に認定。

**舩木 研兒**
1927（昭和2）年 - 2015（平成27年）
江戸時代より170年の歴史を持つ布志名焼窯元　舩木家に生まれる。濱田庄司に師事し、その後、日本民芸館賞、現代日本陶芸展やサロン・ド・プランタン奨学賞を受賞する。昭和28年には、琉球政府の招聘により渡琉、作陶している。リーチの窯場にて研修。これを機に、スリップウェアと呼ばれる英国で17-18世紀頃に盛んに作られた化粧泥で模様をほどこした品物に魅せられ、この技法を本格的に取り入れる。日本に戻り、各展覧会に出品し受賞。

**松井 康成**
1927（昭和2）年 - 2003（平成15）年
長野県生まれ。明治大学を卒業し、茨城県笠間市にある浄土宗月崇寺の住職の跡を継ぐ。その後、廃窯となっていた、山門下の窯を再興し、東洋陶磁の研究を行う。栃木県の田村耕一に師事。練上手の技法を研究し、完成させ、昭和44年には、第9回伝統工芸総裁賞や日本陶磁協会賞などの数々の賞を受賞。平成5年、人間国宝に認定。

**2代 三浦 竹泉**
1882（明治15）年～1920（大正9）年
2代三浦竹泉は初代三浦竹泉の長男として京都に生まれました。
名を敬太郎（後に竹泉）、号を埴隠・篩月庵といいます。
1915（大正4）年、2代三浦竹泉を襲名しました。
創作の才に富み、父に師事して煎茶器の制作に精妙を極めました。
若くして名工の誉れ高かったのですが、早世しました。

**3代 三浦 竹泉**
1900（明治33）年 - 1990（平成2）年
京都生。初代三浦竹泉の三男。三代竹泉。長兄二代竹泉が早世したため大正10年、三代を襲名。昭和6年、二代竹泉の長男に四代竹泉を継がせ、分家独立して竹軒と名乗る。金襴手を得意とし、仁清、乾山風の華麗な茶道具、花器が中心。

**柳沢 淇園（柳里恭）**
1704（宝永1）年 - 1758（宝暦8）年
江戸時代中期の武士、文人画家、漢詩人。服部南郭、祇園南海、彭城百川らとともに日本文人画の先駆とされる。幼名は権之助、名ははじめ貞貴、元服後は里恭と名乗る。後に中国風に修して柳里恭(りゅうりきょう)と名乗ることを好んだ。甲斐(山梨県)甲府藩の家老曾禰保格の次男として江戸に生まれる。多芸多才で、なかでも画に優れる。人の師なったのは16項目もあったとされる。国学にも通じており本居宣長や上田秋成とも交流があった。画は幼年、狩野派を学ぶも飽き足らず、中国画や画史・画譜類で自習し、また吉田秀雪に師事して長崎派の画を修得。門下には、画に池大雅、池玉瀾がいる。